

琉球大学学術リポジトリ

大学生を中心にした若者の「脳死および臓器移植」に対する態度の研究（その2）

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2008-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 朋弘, 浜崎, 盛康, 島袋, 恒男, Tanaka, Tomohiro, Hamasaki, Moriyasu, Shimabukuro, Tsuneo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/3308

大学生を中心にした若者の「脳死および臓器移植」に対する態度の研究（その2）

田中朋弘（法文学部 倫理学）

浜崎盛康（法文学部 哲学）

島袋恒男（教育学部 教育心理学）

A Study on Attitude of the Young - especially of Students - toward Brain Death and Organ Transplantation.(2)

Tomohiro TANAKA(College of Law and Letters - Ethics)

Moriyasu HAMASAKI(College of Law and Letters - Philosophy)

Tsuneo SHIMABUKURO(College of Education - Psychology)

I 背景と目的

脳死状態の患者からの臓器移植を可能にする「臓器移植法」が、1997年6月18日に成立し、同年10月16日に施行された。この法律は臓器移植による以外には助かる見込みのない患者にとっては大きな福音であったが、しかし実際には、施行後1年近く（1998年9月現在）を経ても、脳死者からの移植はいまだ1件も行われていない。やはり、そこにはまだ検討すべき問題が、多く残されているのである。本研究は、そのような現状にある「脳死と臓器移植」について、大学生を中心にして若者のその理解と態度を検討する。そして、そこから脳死と臓器移植にまつわる諸問題を浮き彫りにし、また同時にこの問題と靈魂観や宗教（信仰）との関係を調べることを課題とするものである。

そのために、具体的には、臓器移植法の成立前と後とに2度アンケート調査を行い、それぞれのアンケート調査の分析と相互の比較に基づいて、この課題について検討した。

前回の研究論文(その1)においては、第3部「臓器移植への態度」の「d 臓器移植の前提として死は必須であるか(質問7)」までを検討した。そこで本稿では、第3部の残り2項目を検討対象として、臓器の提供⁽¹⁾と被提供において、各人がどのような考えを持ち、それらがどのような関連性を持つかを検討する(付表参照)。

「e 臓器提供を受けることについて」においては、自分が提供を受けることに関する質問8と肉親が提供を受けることに関する質問9とを個別に分析した後、それらをクロス集計し、 χ^2 テストによって双方の関連性を調べた。

さらに、質問8と質問9の双方と質問3(「脳死は人の死だと思いますか」)、および質問8と質問6(「脳死状態の患者から臓器移植を行ってもよいと思いますか」)とを、それぞれクロス集計し、 χ^2 テストによってそれらの関連性について検討した。

次に、「f 臓器を提供することについて」では、自分が提供の意志を持つかという質問11と肉親が提供の意志を持っている場合の質問12について、各々の結果を分析する。特に質問12では、肉親の意思をどれだけ尊重するかという意味では、患者の自己決定権への態度が見て取れることになる。そしてその後、それらと質問3とをクロス集計し、 χ^2 テストによって各々の関連性について検討した。

さらに、臓器提供を受けることと提供することについて、各々の意識にどのような関連性があるかを検討するため、質問8と質問11をクロス集計し、 χ^2 テストによって両方の関連性を検討した。

以上のような手続きを経ることで、大学生を中心に若者の「脳死と臓器移植」についての理解と態度を検討し、脳死と臓器移植にまつわる諸問題をさらに浮き彫りにしたい。

II 方法

すでに述べたように、調査は2度行われたが、今回の研究報告は1回目

大学生を中心にした若者の「脳死および臓器移植」に対する態度の研究（その2）（田中・浜崎・島袋）

の調査についてであるので、以下の調査対象等に関しても1回目についてだけ述べておきたい。

1) 調査の対象

調査の対象者は、琉球大学の学生420人、沖縄県立看護学校の学生139人、沖縄県主催による看護教員養成講習会の受講者45人、計604人である。

2) 調査実施の方法

琉球大学の学生の場合は、教室でアンケート用紙に記入してもらった。沖縄県立看護学校の場合は、同校に依頼して、同校教員によって教室で学生へのアンケートが実施された。看護教員養成講習会の場合、講習会の会場で受講者に調査用紙への記入をしてもらった。

3) 調査期間

調査実施の期間は、1997年5月23日から6月9日の間である。

4) 調査票

調査項目は、付表に示す通りである。

5) 結果の分析方法

調査の分析では、結果は大きく4つの部分に分けられた。第1部は脳死と臓器移植に関する「知識・関心」について、第2部は「脳死への態度」、第3部は「臓器移植への態度」、第4部は「この問題と、霊魂観および宗教（信仰）との関係」について分析をし、必要と思われる項目についてはクロス集計をし、 χ^2 テストを行った。本稿では、この研究調査論文の第3部後半をまとめている。

III 結果と考察

3 臓器移植への態度

e 臓器提供を受けることについて（質問8と質問9）

質問8では、「もしあなたが病気になる、脳死状態の患者からの移植によってしか助かる見込みがない事態に陥ったとしたら、あなたは臓器移植

を希望しますか。」という設問によって、自分自身が移植を受けることを希望するかどうかについて尋ねた。表1はその集計結果である。「はい」が335人(55.6%)、「どちらとも言えない」が188人(31.2%)、「いいえ」が80人(13.3%)という結果である⁽²⁾。大まかに見て、半数以上がそれしか助かる方法がなければ脳死状態の患者からの移植を望み、約3割の人が迷っていることになる。他方、それを明確に否定した人は13%程度に止まった。

表1 自分が臓器提供を受けることについて

はい	どちらとも言えない	いいえ
335 (55.6)	118 (31.2)	80 (13.3)

単位：人 ()内：%

質問9では、「もしあなたの身近な人(肉親)が病気になり、脳死状態の患者からの移植によってしか助かる見込みがない事態に陥ったとしたら、あなたはその肉親への臓器移植を希望しますか。」という設問で、自分の肉親の場合にはどのような態度をとるかを尋ねてみた。表2はその集計結果である。内訳は、「はい」が393人(65.2%)、「どちらとも言えない」が186人(30.8%)、「いいえ」が24人(4.0%)であった。これを見ると、肉親の場合には、移植を望む人の割合が、先述の自分の場合に比べて約10%増加していることが分かる。他方、移植を希望しない「いいえ」という回答が約10%減少している。「どちらとも言えない」と答えた人の割合は、質問8(31.2%)と質問9(30.8%)とでほとんど変わらず、自分の場合に移植を希望するかどうかの質問8で「いいえ」と答えた人の減少率が、肉親の場合に移植を希望するかどうかの質問9で、そのまま「はい」という答えの増加率になっている。

では、脳死状態からの移植を希望するか否かに関して、自分の場合と肉親の場合では統計学的に見て関連性があると言えるのだろうか。表3は、そのことを確認するために質問8と質問9とをクロス集計した結果である。

表2 肉親が臓器提供を受けることについて

はい 393 (65.2)	どちらとも言えない 186 (30.8)	いいえ 24 (4.0)
------------------	-------------------------	-----------------

単位：人（ ）内：%

そして χ^2 テストの結果は、この表の人数の偏りが有意であることを示している（ $\chi^2=302.09$, $df=4$, $P<0.001$ ）。つまり、質問8と質問9の選択には関連があるということが、統計学的に明らかになったわけである。具体的には、相対的に見て、自分が移植を受けることに積極的な人は、肉親の場合でも積極的な態度をとり、同様に自分の場合に消極的な人は、肉親の場合にも消極的だということになる。質問8と質問9の個別の分析から、10%程度の人が自分の場合と肉親の場合で判断を変えていることが確認されたが、それらの態度変更は、統計学的には意味を持つものではなく、むしろ、自分の場合と肉親の場合の判断が関連していることが確認された⁽³⁾。

表3 自分が提供を受けることと肉親が提供を受けること

質問8 \ 質問9	質問9		
	1 はい	2 どちらとも言えない	3 いいえ
1 はい	302 (77.0)	33 (17.7)	0 (0)
2 どちらとも言えない	71 (18.1)	114 (61.3)	3 (12.5)
3 いいえ	19 (4.8)	39 (21.0)	21 (87.5)

単位：人（ ）内：% $\chi^2=302.09$ $P<0.001$

続いて、脳死を人の死と考えるか否かについての判断である質問3⁽⁴⁾が、移植を受けることについての判断に関連性を持つかどうかを、質問8と質問9の場合で各々検討してみる。まず、質問3と質問8のクロス集計を行う。表4はその集計結果である。そして χ^2 テストの結果は、この表の人数の偏りが有意であることを示している（ $\chi^2=27.42$, $df=4$, $P<0.001$ ）。つまり、相対的に見て、脳死を人の死と考える人は、自分が

移植を受けることに肯定的な傾向を示し、人の死と考えない人は、自分の移植にも否定的な傾向があるということである。

表4 「脳死は人の死か」と自分が提供を受けること

質問3 \ 質問8	1 はい	2 どちらとも言えない	3 いいえ
1 はい	137 (66.2)	163 (51.7)	34 (42.5)
2 どちらとも言えない	52 (25.1)	112 (35.6)	24 (30.0)
3 いいえ	18 (8.7)	40 (12.7)	22 (27.5)

単位：人 ()内：% $\chi^2=27.42$ $P<0.001$

同様に、肉親が移植を受けることに関する質問3と質問9とが関連性を持つかを、それらのクロス集計を行うことで調べてみる。表5はその集計結果である。そして χ^2 テストの結果は、この表の人数の偏りが有意であることを示している($\chi^2=36.08$ 、 $df=4$ 、 $P<0.001$)。つまり、相対的に見て、脳死を人の死と考える人は、肉親が移植を受けることにも肯定的な傾向を示し、人の死と考えない人は、肉親の移植にも否定的な傾向があるということである。一般的な観点から見ても、脳死を人の死と考えるか否かは、人々の臓器移植への態度へ大きな影響を及ぼすと思われるが、質問3と質問8と質問9とをそれぞれクロス集計した以上の結果から、それらが統計学的にも関連性を持つことが確認された。

表5 「脳死は人の死か」と肉親が提供を受けること

質問3 \ 質問9	1 はい	2 どちらとも言えない	3 いいえ
1 はい	152 (73.4)	51 (24.6)	9 (2.8)
2 どちらとも言えない	205 (64.9)	102 (32.3)	33 (41.8)
3 いいえ	35 (44.3)	4 (1.9)	11 (13.9)

単位：人 ()内：% $\chi^2=36.08$ $P<0.001$

次に、一般的な観点において脳死状態の患者から臓器移植を行ってもよいかに関する質問6と、自分や肉親が提供を受ける場合とが統計学的に関連性を持っているかを検討する。そのためにまず、質問6と質問8のクロ

ス集計を行った。表6がその集計結果である。そして χ^2 テストの結果は、この表の人数の偏りが有意であることを示した（ $\chi^2=132.58$, $df=8$ 、 $P<0.001$ ）。つまり、相対的に見て、一般的な観点において脳死状態の患者からの臓器移植を認める人は、自分が移植を受けることについても肯定的であり、認めない人は否定的見解をもつ傾向があるということである。

表6 臓器移植への一般的態度と自分が提供を受けること

質問6* \ 質問8	1 はい	2 どちらとも言えない	3 いいえ
1	49 (84.5)	5 (8.6)	4 (6.9)
2	177 (71.4)	62 (25.0)	9 (3.6)
3	91 (45.0)	79 (39.1)	32 (15.8)
4	14 (18.7)	36 (48.0)	25 (33.3)
5	4 (23.5)	4 (23.5)	9 (52.9)

単位：人（ ）内：％ $\chi^2=132.58$ $P<0.001$

*1：積極的に行うべき 2：どちらかというで行うべき 3：どちらとも言えない 4：どちらかと言うで行うべきでない 5：絶対に行うべきでない

同様に、一般的な観点において臓器移植を行ってもよいかに関する今の質問6と、肉親が提供を受ける場合とが統計学的に関連性を持っているかを検討する。そのためにも、質問6と質問9のクロス集計を行った。表7がその集計結果である。そして χ^2 テストの結果は、この表の人数の偏りが有意であることを示した（ $\chi^2=118.36$, $df=8$, $P<0.001$ ）。つまり、相対的に見て、一般的な観点において脳死状態の患者からの臓器移植を認める人は、肉親が移植を受けることについても肯定的であり、認めない人は否定的見解をもつ傾向があるということである。

このように、脳死についての一般的な見解と、自分や肉親が臓器提供を受けることへの態度は、共に統計学的に関連性を持つことがここで確認された。

表7 臓器移植への一般的態度と肉親が提供を受けること

質問6 \ 質問8	1 はい	2 どちらとも言えない	3 いいえ
1*	53 (91.4)	5 (8.6)	0 (0)
2	196 (79.0)	51 (20.6)	1 (0.4)
3	115 (56.7)	79 (38.9)	9 (4.4)
4	21 (28.0)	44 (58.7)	10 (13.3)
5	6 (35.3)	7 (41.2)	4 (23.5)

単位：人 ()内：% $\chi^2=118.36$ $P<0.001$

*1：積極的に行うべき 2：どちらかというで行うべき 3：どちらとも言えない 4：どちらかと言うで行うべきでない 5：絶対に行うべきでない

f 臓器を提供することについて（質問11と質問12）

ここでは脳死状態における臓器提供の希望に関して検討する。まず、質問11では、「自分が脳死状態になった場合、臓器を提供したいと思いますか」という設問によって、自分が脳死状態になった場合の希望について尋ねた。表8はその集計結果である。「はい」が356人(59.2%)、「どちらとも言えない」が190人(31.6%)、「いいえ」が55人(9.2%)という結果である。約6割近くが提供を希望し、判断を迷っている人が約3割である。明確に否定の意思を示した人は、全体の10%未満であった⁽⁵⁾。

表8 自分が臓器を提供をすることについて

はい	どちらとも言えない	いいえ
356 (59.2)	190 (31.6)	55 (9.2)

単位：人 ()内：%

続いて質問12では、「身近な人(肉親)が脳死状態になり、本人が臓器提供の意思を事前に表明している場合に、提供に同意しますか」という設問で、肉親の臓器を提供することに対する態度を検討した。表9がその集計結果である。「はい」が497人(82.4%)、「どちらとも言えない」が89人(14.8%)、「いいえ」が17人(2.8%)である。実に8割以上の人

が肉親の生前の意思を重要視すると答え、判断に迷っている人は15%弱である。他方、たとえ肉親が生前に提供の意思を表明していても反対するという人は、約3%にしかすぎなかった。この結果からすると、肉親の臓器提供に関しては、大多数の人が肉親自身の自己決定権⁽⁶⁾を重視する立場をとっていると見てよいだろう⁽⁷⁾。

表9 肉親の臓器を提供することについて

同意する	どちらとも言えない	同意しない
497 (82.4)	89 (14.8)	17 (2.8)

単位：人（ ）内：%

さらに、脳死は人の死であると思うかどうか、自分や肉親が臓器提供を行う場合の判断と関連性を持つかどうかを検討するために、質問3（「脳死は人の死だと思いますか」）と質問11および質問12との間でクロス集計を行った。

まず自分が提供を希望するかどうかに関する質問3と質問11のクロス集計の結果は、表10のようになった。そして χ^2 テストの結果は、この表の人数の偏りが有意であることを示した（ $\chi^2=49.24$ 、 $df=4$ 、 $P<0.001$ ）。つまり相対的に見て、脳死を人の死と認める人は、自分が脳死状態になった場合、臓器提供をすることに肯定的であり、そうでない人は否定的に考える傾向があるということになる。

表10 「脳死は人の死」と臓器の提供を受けること

質問3 \ 質問11	1 はい	2 どちらとも言えない	3 いいえ
	1 はい	149 (72.3)	40 (19.4)
2 どちらとも言えない	175 (55.7)	120 (38.2)	19 (6.1)
3 いいえ	31 (38.8)	30 (37.5)	19 (23.8)

単位：人（ ）内：% $\chi^2=49.24$ $P<0.001$

同様に、脳死は人の死かに関する質問3と、肉親が臓器提供を希望する場合それらに同意するかに関する質問12のクロス集計の結果は、表11である。 χ^2 テストの結果は、この表の人数の偏りが有意であることを示した ($\chi^2=24.15$, $df=4$, $P<0.001$)。表11の結果から、脳死を人の死とする考え方のいかに問わず、全体としては肉親の臓器提供の意思を尊重していることになるが、とりわけ脳死に対して肯定的な人は、特にその傾向が顕著になっている。また反対に、脳死に対する考えに迷いのある人、あるいは否定的な人は、肯定的な人よりも肉親の臓器提供への意思に関する判断が難しくなる傾向があると言える。

表11 「脳死は人の死」と肉親の臓器提供の意思

質問3 \ 質問12	1 同意する	2 どちらとも言えない	3 同意しない
1 はい	189 (91.3)	14 (6.8)	4 (1.9)
2 どちらとも言えない	248 (78.7)	60 (19.0)	7 (2.2)
3 いいえ	59 (73.8)	15 (18.8)	6 (7.5)

単位：人 ()内：% $\chi^2=24.15$ $P<0.001$

最後に、臓器提供を受けることと、臓器を提供することとの態度に関連性があるか否かを調べるために、質問8と質問11との間でクロス集計を行った。表12はその集計結果である。 χ^2 テストの結果は、この表の人数の偏りが有意であることを示した ($\chi^2=60.84$, $df=4$, $P<0.001$)。この結果から、自分が脳死状態になった場合、臓器提供を受けるかどうかの判断は、臓器提供をするか否かの判断と関連性を持っているということになる。つまり、臓器提供を受けたいという人は、他人にも自分の臓器を提供するという態度を示す傾向があり、臓器提供を受けることに反対の人は、臓器の提供も拒否する傾向がある。

クロス集計の結果において特に興味深いのは、自分が脳死状態の患者から提供を受けることに肯定的な人のうち、27.0%が態度に迷い、また4.5%が明確に拒否をしていることである。他方、自分が提供を受けることは

拒否するが、他人への臓器提供に同意する人が36.7%あった。このような判断のくい違いは、何に由来しているのだろうか。今後更に検討することが必要になる。

表12 臓器の被提供と臓器提供

質問8 \ 質問11	1 はい	2 どちらとも言えない	3 いいえ
1 はい	228 (68.5)	90 (27.0)	15 (4.5)
2 どちらとも言えない	98 (52.1)	73 (38.8)	17 (9.0)
3 いいえ	29 (36.7)	27 (34.2)	23 (29.1)

単位：人 （ ）内：% $\chi^2=60.84$ $P<0.001$

IV 要約と展望

本稿では、この研究調査の第3部「e 臓器提供を受けることについて」と「f 臓器を提供することについて」について、結果の集計と考察を行った。

「e 臓器提供を受けることについて」において明らかになったのは、以下の点である。まず、自分が臓器提供を受けることに関する態度（質問8）の単純集計に関しては、大まかに見て、全体の半数以上が、それしか助かる方法がなければ脳死状態の患者からの移植を望み、約30%の人が迷っていた。明確な否定は13%程度であった。

また、肉親が提供を受けることに関する態度（質問9）の単純集計に関しては、肯定が約65%で、判断に迷っている人が約30%、明確な否定はわずか4%であった。

質問8と質問9との間の関連性については、クロス集計と χ^2 テストの結果、これらの間に統計学的な関連性が認められた。つまり、自分が提供を受けることに積極的な人は、肉親が提供を受けることにも積極的な傾向がある、ということになる。

続いて、質問3（「脳死は人の死だと思いますか」）と質問8、質問9の間でクロス集計を実施し、 χ^2 テストを行った。両者の関連性は共に統計学的に有意であった。すなわち、「脳死は人の死か」についての判断が、自分や肉親が臓器提供を受けることへの態度と関連性を持つことが明らかになった。前回の研究論文（その1）では、質問3（「脳死は人の死だと思いますか」）と質問6（「脳死状態の患者から移植を行ってもよいと思いますか」）との関連性が統計学的に有意であることが認められたが、脳死が人の死か否かの判断が、一般的レベルだけに止まらず、具体的に自分や肉親が臓器提供を受けることに関しても関連性をもつことがここで明らかになったと言える。

次に質問6（「脳死状態の患者から臓器移植を行ってもよいと思いますか」）と自分が臓器移植を受けることに関する質問8とをクロス集計し、 χ^2 テストによって検討した結果から、両者の判断に関連性があることが明らかになった。それによって、一般的なレベルにおいて臓器移植を受けることに対して積極的な人は、自らの場合でも同じく積極的であり、消極的な人は自らの移植にも消極的であることが明らかになった。

「f 臓器を提供することについて」では、自分が提供の意志を持つかという質問11と肉親が提供の意志を持っている場合の質問12について、各々の結果を分析した。質問11の単純集計の結果によれば、約6割近くが提供を希望し、判断を迷っている人が約3割である。明確に否定の意思を示した人は、全体の10%未満に止まった。質問12の単純集計の結果によれば、実に80%以上の人が肉親の生前の意思を重要視していた。判断に迷っている人は15%弱であった。肉親が生前に提供の意思を表明していても反対するという人は、約3%にしかすぎなかった。

ここでも「e 臓器提供を受けることについて」と同じく、質問3と質問11、質問12の関連性を、クロス集計と χ^2 テストによって行った。その結果、提供を受ける場合と同様に、自分や肉親が臓器を提供することへの態度は、「脳死は人の死か否か」についての態度と関連性を持つことが明らかになった。

さらに、「臓器を提供されること」と「提供すること」についての態度に関連性があるかを検討するため、質問8と質問11をクロス集計し、 χ^2 テストを用いて検討した。その結果は、これらの態度の間には関連性があるということであった。つまり、臓器提供を受けたい人は、自らの臓器も提供したいという希望を持つ傾向があるということである。他方、提供は受けたいが自らが提供することに関しては判断に迷っている人が27.0%、そして提供は受けたいが、自らが提供することは否定する人が4.5%見られた。

以上のように、本稿では、研究論文（その1）を受け、自分や肉親が臓器提供を受ける場合と、臓器を提供する場合の態度を主として検討した。その結果明らかになったのは、臓器提供を受けることと臓器を提供することに関しては、各々に関連性があるということであり、また、それらに関する判断は、自分の場合と肉親の場合とでも同じく関連性があるということである。さらに、研究論文（その1）での問題意識を受けて、「脳死は人の死か」という判断に関する質問3とのクロス集計および χ^2 テストを行うことで、臓器提供を受けることや臓器を提供することが、共に質問3における「脳死は人の死か」に関する基本的な態度に大きく左右される結果になった。これについては、自分の場合でも肉親の場合でも同様の結果が出た。

脳死状態からの臓器移植に対してどのような態度をとるかという問題は、一般的に考えてみても、脳死状態をどのように捉えるかという問題と不可分であるように思われる。ここで得られた結論は、そのような意味ではいわずそのような「当たり前の事実」を検証する結論だとも言えるが、そのような関連性を統計学的に確認することが、本研究の目的の一つであった。

本稿では、第3部の残り2項目を検討した。そこで、次回の研究論文（その3）では、第4部「この問題と、靈魂観および宗教（信仰）との関係」を検討し、第1回目のアンケート調査に関する全体的総括を行う。

注

- (1) 本稿では、「臓器提供」や「移植」というような語を使う場合、脳死状態の患者からの臓器提供や移植を念頭に置いているが、分脈によっては特にそれと断っていない場合もある。
- (2) 同様の問題に関しては、脳死と臓器移植に関する市民シンポジウムにおける2回のアンケート調査では以下のような結果が出ている。第1回平成元年6月3日開催分（アンケート回答総数143通）では、「Q4 あなた自身の治療法として臓器移植以外の方法がないといわれた場合、臓器移植を希望しますか」という設問に対し、「希望する」が43.4%で「希望しない」が37.0%、その他が16.8%で無回答が2.8%であった。第2回平成2年12月8日開催分（アンケート回答総数104通）では、同じ設問に対し、「希望する」が23.1%で「希望しない」が64.4%、その他が9.6%で無回答が2.9%という結果であった。『脳死と臓器移植—見えざる死を見つめて』名古屋弁護士会編、六法出版、1991年、p.135およびp.196。
- (3) このような態度変更の理由を、「8で『いいえ』あるいは『どちらとも言えない』を選び、かつ9で『はい』と答えた人」はその理由を簡潔に書いてください（質問10）、という形で自由記述してもらった。その中には例えば、「肉親は長く生きていて欲しい。」、「肉親の生命維持は優先」というような回答が見られた。
- (4) 研究調査論文（その1）でも検討したように、この判断の根底にはそもそも脳死に関する正しい知識の乏しさという問題点がある。
- (5) この問題に関しても、脳死と臓器移植に関する市民シンポジウムにおける2回のアンケート調査で以下のような結果が出ている。第1回平成元年6月3日開催分（アンケート回答総数143通）では、「Q3 あなた自身が「脳死」になった場合、自分の臓器を提供しますか」という設問に対し、「提供する」が55.9%で「提供しない」が19.6%、その他が21.0%で無回答が3.5%であった。第2回平成2年12月8日開催分（アンケート回答総数104通）では、同じ設問に

対し、「提供する」が40.4%で「提供しない」が35.6%、その他が21.2%で無回答が2.9%という結果であった。『脳死と臓器移植－見えざる死を見つめて』名古屋弁護士会編、六法出版、1991年、p. 134およびp.196.

- (6) 脳死と臓器移植の問題において、生命倫理的な脈絡における「自己決定権」を疑問視する論者もいる。個人の自己決定権を根拠として自らの身体や生や死に関する自由が主張される場合、「自分の身体や生命や死が、自分の所有物である」という暗黙の了解を前提として議論がなされているという指摘がそれである。そのような形で自己決定された死は、「個人閉塞した死」と称されている。『死は共鳴する』、小松美彦、勁草書房、1996年（特に第4章）.
- (7) 1985年に行われた産経新聞のアンケート調査によれば、「自分自身か近親者が万一、脳死状態に陥った場合、臓器の提供に同意する意思のある人」が、調査対象者の77%であった。『「脳死」をめぐる－科学技術社会における生と死』日本尊厳死協会編、人間の科学社、1986年、p.81.

付表

脳死と臓器移植についてのアンケート調査

学部	学科	学年
性別(丸で囲んでください) 女 男	年齢 歳	出身都道府県

以下の質問に答えてください。移植する臓器の種類が問題になると思う場合は、主に心臓を念頭に置いて答えてください。なおこのアンケートは、全体的傾向を知るためのものであり、あなた個人に迷惑がかからないように処理されます。

1. 脳死を人の死とする臓器移植法案が国会で審議中であることを知っていますか。
(1) はい (2) いいえ
2. 人の死を法律で決めることについてどう思いますか。
(1) 決めてよい (2) どちらとも言えない (3) 決めるべきではない
3. 脳死は人の死だと思いますか。
(1) 人の死である (2) どちらとも言えない (3) 人の死ではない
4. 脳死判定を行うか否かは、誰が決めるべきだと思いますか。
(1) 医師 (2) 患者本人と家族
(3) 患者本人・家族・医師の協議

5. あなた自身の場合に、あなたは脳死判定を希望しますか。
(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ
6. 脳死状態の患者から臓器移植を行ってもよいと思いますか。
(1) 積極的に行うべき (2) どちらかというところで行うべき
(3) どちらとも言えない (4) どちらかというところで行うべきではない
(5) 絶対に行うべきではない
7. 脳死を人の死とせずに臓器移植を行ってもよいと思いますか。
(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ
8. もしあなたが病気になり、脳死状態の患者からの移植によってしか助かる見込みがない事態に陥ったとしたら、あなたは臓器移植を希望しますか。
(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ
9. もしあなたの身近な人（肉親）が病気になり、脳死状態の患者からの移植によってしか助かる見込みがない事態に陥ったとしたら、あなたはその肉親への臓器移植を希望しますか。
(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ
10. 「8で『いいえ』あるいは『どちらとも言えない』を選び、かつ9で『はい』と答えた人」はその理由を簡潔に書いてください。

11. 自分が脳死状態になった場合、臓器を提供したいと思いますか。
(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ

12. 身近な人（肉親）が脳死状態になり、本人が臓器提供の意思を事前に表明している場合に、提供に同意しますか。

(1) 同意する (2) どちらとも言えない (3) 同意しない

13. 「11で『はい』を選び、かつ12で『同意しない』と答えた人」はその理由を簡潔に書いてください。
-
-

14. 「脳死状態」と「植物状態」の違いを知っていますか。

(1) はい (2) いいえ

15. 14で「はい」と答えた人は、その違いを簡潔に書いてください。
-
-

16. 肉体が減んでも靈魂は存続すると思いますか。

(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ

17. あなたはいわゆる「靈魂の輪廻」を信じますか。

(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ

18. あなたはある特定の宗教を信じていますか。

(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ

ご協力ありがとうございました。

琉球大学法文学部人間科学科人間行動講座（哲学・倫理学）